

ともに学ぶ学校もっと

写真は朝日新聞3月27日朝刊「重い障害ある新居優太郎さん 春日丘高定時制卒業」。朝早く記事をフェイスブックで紹介すると、多くの反響があった。

その日の夕刊「枚方(ひらかた) 読めた人 59%」という記事にも注目した。新居優太郎さんが枚方市に住んでいるからだ。一難読とされる市名の読み方について枚方市が調査結果を発表した。「ひらかた」と読めた人約 59%。誤読で最多だった「まいかた」の約 26%を大きく上回った。「正答率は半分以下」という自虐的な予想を覆す結果に、市は喜んでい。こんな記事に「まいかたっ？」と突っ込みたくなるが、話を優太郎さんに戻そう。

新聞を整理していると、先の記事を書いた中野晃・論説委員が、3月18日夕刊「葦 タベに考えるーともに学ぶ学校をもっと」で優太郎さんを紹介していた。達成感に満ちた表情だった。

3月初旬の日曜日、大阪府枚方市に住む新居優太郎さん(19)は、4年間通った府立春日丘高校定時制(茨木市)の卒業式で念願の卒業証書を手にした。

優太郎さんは人工呼吸器を装着し、手足や口が自由に動かず、たんの吸引や胃の穴からの栄養投与といった医療的ケアが必要だ。ことばも話せず、問いかけにまばたきで「はい」と答え、「いいえ」なら目を開いたままで意思表示する。そうやって学校の試験もこなしてきた。

府が配置する看護師や介助員、学習支援員が学校生活を支え、親の付き添いなしで東京への修学旅行にも参加した。登下校を手伝った母の真里さん(47)は「先生や友人など多くの人とのつながりができ、成長しました」と振り返る。

何よりの楽しみは科学部だった。授業のあとの部活で帰宅は深夜になったが、父の大作さん(47)は「部活があった日は充実した表情でした」と話す。

4月からは放送大学で勉強を続ける。

学びへの意欲は、障害があるからこそ強い。仲間の願いを実現できる学校が増えてほしい。優太郎さんは訴えている。

(2019年4月6日)

